

突撃インタビュー

編集部ハルちゃんが行く！

ハルちゃんって誰？



本誌の編集担当者。みなさん、夏休みは堪能されましたか？ 私は今年はどこにもゆけず、ひたすら実家と祖母宅との往復で終わってしまいました～(ToT)。というわけで、今回の取材はほぼ唯一と言っていい遠くへのおでかけ！ はりきりすぎて、行きの新幹線では東京駅にてお弁当を3つとおやつとお茶とコーヒー（食べるのは2人）を買ってしまったのは内緒です。

今回の取材地は、忍者の里・伊賀。航空機主翼の加工システムをはじめ、名だたる大企業の技術を、ふだんは目に見えないところで数多く支えている会社です。社長が語る「忍者的発想」とともに、お話をうかがってまいりました！

第81回目 株式会社 北岡鉄工所



〒518-0809 三重県伊賀市西明寺2231番地
TEL (0595)26-2555
www.ktok-iw.co.jp

お話を伺った方



代表取締役社長

北岡 正次 氏

□■ 今回のお題：忍者的発想!? ■□

忍者との共通点とは!?

ハル: よろしくお願ひします。伊賀といえば忍者が有名ですが、それにしても御社のパンフレットを開いたら冒頭に「『音なく、匂ひなく、知名なく、勇名もなし...』と忍術秘伝書にも書かれているように、誰の仕業かわからないような仕事をしたのが忍者です。」と書いてあってびっくりしました(笑)。でもたしかに、独自の加工技術や発想をもとに、各業界の先進的コア技術を提供してきた御社は、“ふだん人目には触れないところで大きな業績をあげている”という点では忍者に通じるところがありますね。

北岡: そうですね。当社は昭和39年に創業して以来、常識にとらわれず多様性に富んだ会社づくりを目指してきました。当社のような名もなき企業こそが、かえって柔軟に最先端の情報をより早く得ることができたり、コアな情報や技術を他に漏洩することなくしっかり守っていくことができると思います。伊賀の地は、行政は名古屋、経済は大阪、文化は京都と、さまざまなところから影響を受けているんですよ。

ハル: 北岡社長は伊賀のご出身なんですか？

北岡: そうです。北岡鉄工所は50年ほど前に父が創業しました。私は2代目

社長になりますが、早くから実質的な経営をやってきましたので、2代目というより1.5代目ですね(笑)。

ハル: 御社はダイヤモンド工具や半導体製造部品の製造をはじめ、独自の技術で大手企業にコア技術を提供なさっているそうですが、創業当時からこういったことを手がけていたんですか？

北岡: いえ、当初は孫請けです。ダイヤモンド工具の台金製造が主流で、難しい・納期がない・安い、が多かったですね。でもあの時代に、逆境に立ち向かう強さを培いました。2000年くらいまでは順調に下請けの仕事もありました。ところがITバブルが弾けたとたん、儲からない仕事ばかりになりました。あの頃は売上が6割に減りましたね。

ハル: それは大変でしたね...

北岡: でも、すべて天の思召しです。うまくいかないというのは問題がある点(天?)を見直せと言われていたということなんです。そこで問題点を徹底的に見直すとともに新たな技術開発を試行錯誤してきた結果、現在に至るというわけです。

ハル: なるほど、点と天ですか。そういえば御社の製品には単結晶ダイヤモンドのツイストドリルもありますよね。ダイヤモンドコーティングや多結晶ダイヤモンドではなく、単結晶ダ

イヤモンドを丸ごと刃部に使用しているとか。

北岡: ええ。世界にない単結晶ダイヤモンド工具をと考えました。多刃の単結晶ダイヤモンドエンドミルも開発中です。当社の工場で使っている設備や設計は必ず独自でカスタマイズし、性能向上や情報が漏れないようにしています。

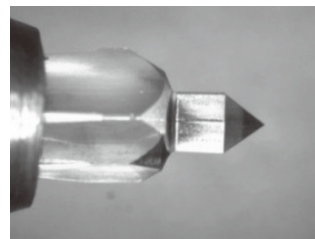
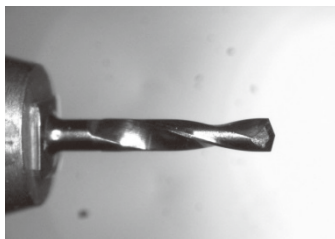
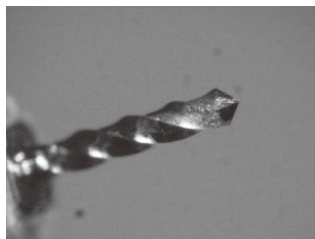
北岡社長の発想法

ハル: 今はどのようなものが御社の主力なんですか？

北岡: 航空機の主翼加工システム等の航空関係ですね。ウォータージェットで加工するシステムをプレゼンしたところ、即採用になりました。

ハル: きっとそれまでも大手メーカーも試行錯誤してたらうに、その発想を上回るやり方を考案したんですね。そうした独自の技術やシステムをいろいろお持ちのようですがどうやって思いつくんですか？

北岡: この加工システムに限らず、私はまず「一般的な考え方」と「それに対局する考え方」の両方をじっくり考察するんです。そうすると見えてくるものがあるんですよ。また、開発や実験には6軸加工機やブルーレーザ測定器など最高級のものを使っています。そこに今まで培ってきた



北岡鉄工所さんが手がけている製品の一部をご紹介します♪ 上段左から、単結晶ダイヤモンドツイストドリル4枚刃(φ0.5)ならびに2枚刃(φ0.3)、単結晶ダイヤモンドセンタードリル。下段は単結晶ダイヤモンド球軸一体型スタイラス(φ0.2)です。

日本のものづくりを陰から支えている、優秀な忍者たちなんですね！

技術と新たな発想を加える。昔からの古い技術と最新の技術を融合させると突き抜けたものができると思います。最新のものだけではダメなんですよ。「新しさを温めて故きを知る」(温故知新)ですね。

ハル:なるほど～。

北岡:私は「工芸品を工業品に」ということを常に頭に置いているので、工芸展にはよく足を運んでいます。たとえば螺鈿(らでん)なら、硬い貝片とやわらかい漆の組み合わせから発想を広げて、何かとダイヤモンドと一緒に加工する実験を繰り返したりね。

ハル:あらゆるところにアイデアのタネがあるんだなあ。御社には金属のみならず、ダイヤモンドをはじめとするさまざまな非金属加工で培ってきた技術もありますもんね。ダイヤモンドといえば、御社の応接室にダイヤモンドの真球写真がありました、あれはどういった製品なんですか？ 取材に同行した某教授がまっ先に飛びついて反応してましたけど... (笑)。

北岡:あれは製品ではありませんよ。

ハル:へっ？

北岡:当社ではまず、究極の形をつくってみるのです。まず頂点、究極のところに手をつけるということですね。究極のものをつくって、あちこち見せて回るんです。そうすると、たとえば今回のように、そこに付加価値を見出した方が新たな提案や相談を持ちかけて

くださることも多いのです。伊賀の忍者は各地特産品を定期的に買いに廻ったりして情報を集め、その情報分析をしていたといわれています。こういった点も、当社のやり方と共通していますね(笑)。

ハル:そういう方法もあるのかあ。企業を発展させるために考えついたんですか？

北岡:いや、単なる性分ですわ(笑)。小学生の頃から、たとえば算数のテストで5問あったら、一番難しい5問目から手をつけるようなヘソ曲がりな子供でしたから。できる問題をやっても何も進歩しませんからね。とはいえ、今の私はアイデアを出すだけです。「丸いダイヤをつくりたいんや」とだけ言って、あとは社員に任せます。社員が本当に煮詰まっていたら、ちょっとヒントは与えますが。

ハル:見てるとうずうずしちゃいますね？

北岡:ですから社長室に引っ込んで、なるべく見ないようにしています。今は自分の中に新たなテーマが見つかったので、そちらに没頭しています。商品の寿命が短い時代ですから、何かひとつにこだわらず、柔軟に次々と手を変えていく必要があります。狙っていた市場に進出して、落ち着いたたら若い者に任せ、私は次のことを考えるのです。

ハル:ご自身のアイデアについて、不

安になることはありませんか？

北岡:「自分がやってることが、必ず来んねん」という、確固たる妄想がないとダメですね(笑)。発想10年開発5年で、世間の需要が生まれてくるものなんですよ。

ハル:情報を集め、分析して先読みするという忍者の手法のなせるワザですね！ でも誰でも斬新なアイデアが浮かぶとは限らないし、北岡社長のあとを継いでそういったアイデアを生み出すトップの方を見出すのは大変そう...

北岡:いや、同じタイプの経営者が2代続いたらダメなんです。種を蒔く人→育てる人→また種を蒔く人、という流れのほうがいいと思いますよ。

今後の展望は？

ハル:今開発中のものには、どんな製品があるんですか？

北岡:たとえば自由形状で高精度な単結晶ダイヤモンド工具を試作開発しています。同時5軸制御のレーザー照射で微細加工する技術を開発し、ダイヤモンドやcBNへの微細3次元加工を施す加工システムです。

また、最近オーディオのお話をいただき、先端の軸もダイヤモンドで一体化したレコード針をつくったりしていますよ。興味の対象は尽きませんね。

取材のあとのお楽しみ♪

伊賀といえば...伊賀牛！ 前にも書いたように普段は特売りの肉が御用達のワタクシですが、取材時となれば話は別です！ というわけで、伊賀牛と地元で採れた新鮮なお野菜の網焼きを堪能してまいりました♪ 炭をおこし、女将さんがサッとタレにつけてから焼いてくださる伊賀牛は、厚みがあるのにお箸で切り分けられるほどやわらかくてジューシー。ほおばると、お肉自身の甘みが口いっぱいにひろがって、もう悦楽の境地です。都内でごくごくたまに奮発して高いお店でお肉を食べることもあるけど、美味しさのレベルが違うなあ。う～、思い出しただけでヨダレが出てきた...

こんなモノ
★見つけました★



ダイヤモンドの真球

本文内にも書きましたが、取材場所の応接室に入ったとたん、同行の某教授が飛びついたのがこれ。素人のワタクシからすると「おお、丸い！」としかわからないのですが、知識ある方はこれを見ただけでその技術力や新たな可能性が見えるらしく、取材後はこの真球をきっかけに、様々な談義に花が咲いていました。忍者の手法、効果絶大のようですね！